

次の随筆には一部不適切な表現も含まれますが、作者の意図を尊重し、そのまま掲載しております。

## 亡霊の囁き

大庭 みな子

戦争、これは私の人生の風景の中に常にどうしようもなく大きくひろがる黒い影である。その黒い影のために、輝く太陽は翳り、青い丘が砂漠になる。自我の形成期に私を、屈辱、無力、絶望で凌駕し、同時に、私の中に反逆のエネルギーをひき出した、生命の欲望そのものにつながる根源的な怪物である。偉大なる教訓、衝撃、酷薄な生命そのもののむきだしのプロフィールである。私は戦争によって人間に絶望し、人間を回復し、意志と情念と

存在そのものをとり戻したのだ。もし戦争がなかったら、私は人間を淡く信じ、人間に淡く落胆し、そこはかかない歓びと哀しみの合間に人生をたおやかに生きてただろう。

戦争は人間からあらゆる優美さをはぎとり、人間に獣性の血走った眼を与え、錆びた鉄のきしむような哭声を立てさせる。それは見なくてすめば、それにこしたことはない人間の本性かもしれない。だが、一度見てしまったものを忘れるわけにはいかない。

昭和十九年の春から二十一年の春まで、私は広島県の西条という町にいた。今は東広島市という名になっているが、当時は広島県賀茂郡西条町だった。西条の広島県立賀茂高等女学校で二年生と三年生を過したのである。二年生の後半と三年生の前半を学業は放棄させられ、学徒動員でミシン作業をやらされた。学校が広島陸軍被服廠の分工場になり、一日十一時間の労働、休日は月に一回しかなかった。

食糧もなく、衣料もなく、考える道具は片っ端からもぎとられた。岩波文庫の赤帯を持っているというだけで自由主義者だと言っただけで、ミシンの針を折ると、国家の貴重な資源をおろそかに扱ったと言っただけで、兵隊さんのシャツを縫う代りにあやまって自分の指を縫ってしまったときでさえそうである。病院で割れた指の間から折れた針をひきぬかれたとき、私は声をあげて泣きじゃくった。痛かったからではない。戦争とはこういうものだと言われ、胸がはりさけたからである。

私は西条の町から六、七キロ離れた村に住んでいたが、バスは戦時中の燃料節約で日に数本しかなかった。一番のバスに乗っても朝七時の始業の時間に合わなかったし、六時まで作業をしたのではバスはもうなく、日がとっぷり暮れたから西条の町に部屋を借りた。食事つきの宿ではなく自炊である。当時、家族だけで食べるのがせいっぱいで、学生を下宿させて食事を出す家など一軒もなく、寄宿舎も、生徒はすべて栄養失調で、閉鎖寸前の状態だった。私は十四歳で朝五時に起きて自分で御飯を炊き、帰

ると独りで食べるものを算段しなければならなかった。学校で勉強するためではなく、戦争で死ぬ兵隊さんたちのシャツを縫うためにである。

「お国のために働いていらっしやる兵隊さんたちの肌着に、あなた方の真心をこめなさい」。教師たちは一様にかつと見開いた眼と、裂けた口の般若の面で言い、流し作業で一日何枚かのノルマをあげないと生徒たちをきつく叱責した。十四歳だというのに、私は朝から晩まで肩がこり、級友の何人かが次つぎと病いでたおれると、暗澹とした気分になった。多くは結核が重症の脚気で、当時結核は死病だった。

連日判で押したように空襲があり、空襲警報の間だけ私たちは麦畑に待避させられた。学校が工場になる前に、私たちは校庭にいくつもの防空壕を掘らせられたが、どういうわけかその自分たちの掘った防空壕に待避させられたことは一度もない。多分、学生みんなを収容するには足りなかったのだろう。しかし、そこが

貴重な物資や工場のVIPのために使われていることは周知の事実だった。

だが麦畑は気分がよかった。舞いあがる糸ぼこりもなく、少なくともその間私はこっそりと本が読めた。麦畑の中では、雲雀の囀りにかこまれて私は孤独を満喫することができた。B29の編隊は美しい銀色の翼をきらめかせながら、いつも呉のあたりに爆弾を落としていた。初めのうち、私はぼんやりと眺め、逃げまどっている呉市の人々を想い浮かべ、今確実に死んでいる世界中の戦場の人びとのことを想ったが、終戦間近の連日の空襲ではいつの間にか自分の心が麻痺しているのに気づいていた。

麦畑の中で私はツルゲーネフの『あいびき』やチェーホフの『可愛い女』などを読んだ。それから独歩の短篇なんかを。いつもびくびくとかくし持ってわずかなひまを盗んで読む本だったから長篇は読めなかったのである。ユゴー、トルストイなどは下宿に帰ってこっそり読んだ。それらはどれもこれも途方もない、自

分の周囲にはあり得ない、けれど自分の知らない場所に確かにある真実の物語に思われた。見知らぬ外国の物語であるのに、見知らぬ国に住む人びとの心のほうが、この日本に住む人びとの心よりは私の心を打ち、真実を語っているように思えたので、私は困惑したのである。そこに書いてあるような事がらを、ほんとうに心の中で思っている人は、あたりを見まわしても誰一人居ないように思われた。教師たちや年上の人びとを見ても、彼らの心の中は皆目はかりかねた。彼らは二言めには「お国のために」と言うだけで、文学的な話題といえ、ときたま戦争映画や愛国的な詩歌のことを言うきりだった。彼らは謹厳な顔をして常に「滅私奉公」といった言葉を使った。

私はモーパッサンの恋愛小説を持っていてひどくなぐられて以来、空襲になるとなるべく一人だけ離れて遠い麦畑の中に身をひそめて、こっそりと薄っぺらな岩波文庫をとり出し、数頁を読み、独りでその小説世界についていろいろな空想をめぐらした。そして自分はその作家以上にもっとその空想世界を拡げることが

できるのに、などと妙な喜びを感じて悦に入るのだった。

あるとき、広島被服廠長の巡視があった。分工場の生徒たちは全員整列させられ、「カシラア、ミギ」とか、「カシラア、ヒダリ」とかさせられたが、そのとき号令をかける教師は常日頃から、唇の両脇から泡を吹き出すようにして半狂乱のような叫び声と共に、血走った眼を宙にすえるので、生徒たちから遠巻きに怖れられていた。彼が天皇のことを話し出すと、彼の眼には涙がにじみでて、ときにはそれを拳で拭ったりするのである。また、彼は「天皇陛下」の下に更にサマをつけ、いくらか舌が短いせいもあって、彼の訓辞の中でテンノウヘイカサマという言葉が続出すると、彼の舌はぶぎまにもつれて、前後の文脈が通じにくいほどであった。彼の話を聞いていると私は「ナマゴメ、ナムムギ、ナマタマゴ」と口の中で呟いてうつむくのだった。そのときも、彼の唇の両脇から吹き出す泡の量があまりに多く、将官である廠長閣下の前での緊張の度がひどいため、全身がふるえ出すのがはっきりとわかったので、生徒の中には笑いをこらえようとしてその

緊張のために蒼ざめる者がいるのを私は見た。私はその教師が唇から泡を吹いて「カシラア、ミギ」と叫んだ途端に目が合って、自分の顔が奇妙に硬直するのを感じた。私はそれを自分の中に自動的に起った嘲笑と侮辱だとははっきり意識しなかったが、大変な失策を犯してしまったことを直観し、恐怖にかられた。案の上廠長が帰ってしまうと、その教師に呼び出され、いきなりなぐられたのである。彼は獣のようなわけのわからない咆哮を発し、彼の胸のあたりまでしか背丈のない栄養不良の少女の私にとびかかってめちゃくちゃになぐりつけたのである。

そばにいた女の先生がとりなしてくれなかったら、私はどうなっていたかわからない。私もまた、そのときわけのわからない叫び声をあげ、とんでもない事件に発展したかもしれない。

私はこれに似た経験を学生時代数度持っている。教師に突然の激怒を爆発させる天分を持っているらしい私は、もし女でなくて男だったら、かなりの大怪我をしていたかもしれないと思うの

だ。

私は権威に対する疑惑を母から植えつけられたのではないかと  
思っている。母は戦争がだんだんひどくなって、若者たちが特攻  
隊と称する自殺行為に追いこまれたとき、昂奮して叫んだ。「あ  
あ、往来にとび出して、人だかりの真中で、大声で叫んでやりた  
い。日本の気違いが！」。そして母は父に八つ当たりし、「あなたは  
権威に卑屈なのだ」と罵った。

父は困り果てて、母の昂奮がおさまると、「どうか、ヒステリー  
を起さないでくれ」と言いながらも、そういう母を畏怖している  
ことが子供である私にははっきりとわかった。父は当時西条の近  
くにあった海軍病院の院長であったが、祝祭日などの式典のとき  
の、部下たちへの訓辞の下原稿を必ず母に直させるのだった。母  
は文章を綿密に検分し、すべてこうした訓辞は短ければ短いほど  
よく、どんな名文であっても長たらしい演説など部下はうんざり  
するだけだ、とつけ加えるのだった。また母は父の部下たちが髪

を軍隊風に短く刈りこみたがらないのを、常に同情し、そういう  
ことに院長が口をさしはさむべきではないと父をいませめた。彼  
はときどき母を口では「この非常事態にお前の理屈は通らんのだ  
っ」と罵ったが、相変らず訓辞については母の意見を求めてい  
た。

母が死んでから、父は母を思い出してはよく泣いた。

父は何ごとによらず非常に清廉な人で、潔癖すぎるため、周囲  
の反感を買うことが多かった。つまり、融通が利かない性格なの  
である。けれど、臨床医としての評は高く、旧海軍でその右に出  
るものはないだろうと言われたほどである。

父は医学生の際、ある娘を恋して周囲の反対を押し切って結婚  
した。その父の最初の妻は若くして病死した。彼女が死ぬ少し前に  
書いた遺書は、父の誠実さに対する感謝の言葉で埋められている。  
私の母はその人の妹である。遺書の中に、もしできることな  
ら、妹を貰って欲しいという故人の意志があったからである。

父は文学書というものをほとんど読まない人であったが、彼が青年期に読んで感動したという二冊の本があった。それはユゴーの『レ・ミゼラブル』とトルストイの『復活』である。特に父はトルストイに心酔していて、トルストイの作品によってのみ、文学の存在を認めていたようなところがあった。父はトルストイのように人一倍人間的な欲望の強さに苦しみ、その故にその欲望を制御しようとする人並秀れた意志力のある人だった。他の多くの文学書を、父は読む前から軟文学ときめつけ、興味を示さなかった。

しかし、父の最初の妻の子供である異母兄と、私の母は文学好きで、大正から昭和にかけて出版された多くの文学書を買いき、私は子供の頃から自由にそれらの本をひっぱり出して読むことができたので、戦争中の私は非常に偏った孤独なやり方ではあったが、文学の世界に眼を開くことができた。

西条にいた頃の私の生活はまあそんな風だった。西条の町で部

屋を借りていた家は、神笠氏という古い商家で、倉が二つもある奥行の深い家だった。細長い家の中ほどに台所があり、神笠家の人びとも私たちも（当時私の二つ年下の妹も女学校一年で私と一緒に自炊していたし、その他私より少し年上の同じように学徒動員で働いている二、三の女学生も部屋を借りていた）みんなその台所を使うのである。広い家なので、それぞれいろんな部屋にいたが、私たちは表通りに面した二階の十二畳に寝起きしていた。

三十年ぶりに、その神笠家を訪れたが、老夫婦は元気で、私を当時と同じように「嬢ちゃん、嬢ちゃん」と呼んで、その頃毎晩空襲のとき避難した倉などを見せてくれた。神笠氏はその頃、丁度今の私くらい年齢だったと思うが、その人の言った言葉でひどく心に残っているものがある。近所に住んでいた生まれたばかりの赤ん坊とよちよち歩きの子供をかかえた若夫婦の所に赤紙が舞い込み、人びとが「おめでどうぞございます」と言っていると、彼は台所で水を汲みながら吐き出すように、こう呟いたのである。「何がめでたかろう。むごいことじゃ。小さい子を残しての

う。――」。私はその言葉の故に、その後その人を新たな尊敬の眼で見ることが出来た。それは戦争中聞くことのできた数少ない人間の言葉であった。

私が文学書の中で心をゆり動かされる、果してこんな言葉を今の世に人間は呟くことができるのだろうかと思っていた種類の言葉だったのである。母は夫や子供の前でこそ「日本の気遣いが」と喚びはしたが、遂に往来にとび出してはそれを言う勇氣はなかったし、他人の前では清廉な軍人の妻としてとりまわっていた。だがその人は、少なくとも危険な他人かもしれない、愛国的であることを強要されている数人の女学生たちの前で、はっきりと聞こえるほどの声で言ったのである。

その人たちはそれから三十年経った今、その古い大きな家で、老夫婦だけでひっそりと暮している。想いの深い人びとである。

西条での私の少女時代は、未来を閉ざされた、屈辱と恐怖に満ちたものだった。終戦間際で、軍は一般市民たちから白い眼で見

られるようになっていたし、私たちは海軍の将官の家族だというだけで、こっそりうまいことをしているに違いないといった憎しみでとりかこまれていたが、実際には父のそんな性格もあって、家族たちは一般の人びと以上に飢えていた。

私は当時自分の父が海軍に在籍していることをひどくいやなものに思っていた。父の地位さえなければ、母は普通の人たちのように闇買いでもなんでもできるのに、と思ったものだ。また他人の憎しみを買うこともないだろうと思えた。

三年生の夏に日本は降伏した。虚脱状態である。その少し前、広島に原爆が落ちた。当時人びとはビカドンと言っていた。その怖ろしい情景を、私たちは広島から西条に避難して来た人びとから聞きし更に暗い気持になった。

終戦後一週間くらいして、多分八月二十日すぎだと思うが、西条の女学校の生徒たちは広島島の焼跡の救護作業にかり出された。学校工場は解散して、学校の授業は復活するはずだった。しか

し、実際問題として教科書も何もないのである。今までの教科書は全部嘘が書いてあり、いけないものだと言うことであつた。そこで、ぶらぶらしている学生たちは救護作業にかり出されたのである。

それは太陽のきらきら輝く日だつた。私たちは作業服にリュックを背負つて広島に着いた。防空頭巾を持たないで歩くということに私たちはとまどつていた。もはや、空襲がないということが、私たちを別の不安にただよわせていた。国が破れ、空だけが青く、太陽が輝いているということが耐えられないものに思へた。

——それは、黄泉の国の旅であつた——。地獄の観光案内をつとめる黒い着物を着た悪魔が、奇怪な笑い声を立てながら耳元に囁く声を聞き流しながら、私たちは瓦礫の中を白い骨を踏んでよろめきながら歩いた。

私たちが配属されたのは、本川小学校というほとんど爆心地に

近い救護所だつた。そこには三百人ばかりの負傷者たちがコンクリートの床の上にごろごろと腐つた魚のように並べられていた。男と女の区別さえほとんどつかなかった。腐りながらうごめいている、眼を見開いて、唇をひらき、蠅を追っている地獄の住人である。彼らのからだは深くえぐれ、そのえぐれた血みどろの溝に、一面に盛りあがって何百という蛆が飴色の行列をつくつていた。彼らは蛆に覆われていた。背中にも、腕にも、肩にも、腹にも、脚にも、のどにも、頬にも、唇の脇にも、腕にさえも、蛆が這つていた。髪の毛は帽子の形を残して丸く焼け、睫毛も焼き切れ、皮膚は、皮膚の色をしていなかった。

彼らは次つぎに死んだ。毎日数人ずつ。毎日の作業は、生きている者の中から確実に死んだ者を選び分けるといふ仕事だつたのだ。私たちは炊事班と称していたが、私たちの配る雑炊を食べべられた者が、果してどのくらい居ただろう。居たとすれば、死んでいく者を見とる者だけだつただろう。そこにいた三百人の負傷者たちの全員が、遅かれ早かれ息ひきとつたのではないかと、私は



思う。私たちはそれを、ただ眺めているしかなかったのだ。悪魔の嘲笑を聞きながら――。

「――ほおら、これが、お前たちの、意志で、お前たちの手で、お前たち自身がやったことの結末なのだ。よく見るがよい。よく。お前たち人間の欲望の――結末だ」。悪魔は更に続けた。「なあに、アメリカを憎むことはない。日本だって、全く同じことをやったろうよ。もし日本が先にピカドンを持っていきえればね。お前たちの違いは、どちらかが先に、そいつを造り、先にそいつを、使ったというに過ぎないよ。

これで、ちよっぴり、ひと休みさ。こう焼野原じゃ、しばらく壊すものもありやしない。なあに、直き、また始めるさ。自分たちで壊したものを、また、性こりもなく、造り直し、そいつができあがる頃は、何もかも忘れてしまうのさ。忘却という素晴らしい能力を、お前さん方は持っていらっしやるからね。そいつが、おれたちの、大好きな、舌なめずりして待っている、素敵に甘い蜜

なんだ。

なに、こいつは蜃気楼に過ぎない。魔法の覗き眼鏡、ぐるりとまわせば、あつという間に瓦礫の原は花園にも、楽園にも変わるだろうよ」

私は頭蓋骨にみつめられながら、お米をといた。無数の白い枯枝のような骨が一面にちらばっていて、それを踏まずには水道のある場所へ行けなかった。そこは一種の共同井戸で、焼野原から、罹災した浮浪人のさまよい出てくる場所だった。多分、市が応急に何か所かの水を使える場所をしつらえたところだったのだ。

私は十四歳だった。そこでお米をといたり、じゃがいもの皮をむいたりしていると、何人かの幽鬼のような人たちがすらっと音もなく近づいてきて、私の手元をじっと見つめている。彼らは私たちの使い残した野菜の屑を拾うためにそこに待っているのだ。た。

私たちは校庭で薪を積み、火を焚いて、その上に大きな風呂釜  
ほどもある鉄鍋を置き、そこにお米と野菜を入れて、交替でその  
まわりを白をひくろばのようにまわってかきまわしながら、ぐつ  
ぐつと煮るのだった。どんなに気をつけてかきまわしても、雑炊  
は直ぐこげついて、みんなに気をつけてかきまわしても、雑炊  
ほどの糊状のおこげがはりつくのだった。

すると、またしてもどこからともなく幽鬼のような罹災者たち  
が集ってきて、釜のまわりに群がるのだった。彼らは初めのうち  
は、おずおずと、やがてすさまじいガリガリと人の骨を噛むよう  
な音を立てて、そのおこげをひっかき落とし、あつという間にその  
鉄鍋の底は、一粒残さず、きれいにこそげ落される。怯えた私た  
ちは少し離れたところに突っ立って、茫然と、その光景を眺めて  
いた。

雑炊鍋の焚火からほんの少し離れて、死体を焼く穴が掘ってあ  
った。毎日幾体かの死体がそこに投げこまれ、油をかけて火がか

けられた。雨の降る日は煙ってなかなか燃えず、そばを通ると目  
にしみた。

見渡す限り瓦礫の原には、ところどころに焼け残った鉄骨のビ  
ルもあったが、それらがそこにそうして建っていることも、そし  
てその中に私たちのようにかり出された救護人と、死にかけた魚  
のような人間たちがいるであろうことも、何の意味もないこと  
に思われた。校庭のすぐ脇に川が流れていた。この川にも原爆直後  
は死体があふれていたというが、その頃は川に流れる水だけが不  
思議に美しく思われた。私は波間にくずれる月影を見て、「国破れ  
て山河あり」という言葉の意味を考えた。「自然の中での人間」の  
意味を人生で初めて自分の肌で感じとった最初の記憶である。

今では人間たちは月にロケットを打ちあげている。太陽から火  
を盗み、人間を焼き殺せた人間なのだから、月の砂漠に旗を立て  
るぐらいのことは、なに、ほんのささやかなお遊びだ。「人間とは  
好奇心が強く、欲望を制御することができず、自滅することが判

つていても、あえて自滅の道を選ぶ性質を持った不思議な動物である。私は三十年前原爆の焼野原で死体を焼く煙にむせながら、川に浮かぶ月を見て、そしてその焼土に、七十五年は草木も生えぬと言われている焼跡に、その原爆落下後一月もたたないうちにバラックを立て住み始めた人間たちのともす灯を見て、ガリガリと雑炊の鍋をこそげる浮浪人たちのすさまじい生きる力を見て、「生命」の冷酷さに怯えたのである。

敢えて言うならば、私は十四歳の夏以来、「人間は万物の霊長である」といった言葉に疑問を持つようになったのだ。

だが、この目の前に見た敗戦とあらゆる価値基準の崩壊によって、私は少女時代を平和な時代の何倍もの深さで生きることができたのではないかと思う。広島を見たあとでは、私は人間たちの生み出すあらゆる悲惨、残虐、欺瞞が、どんな形でむき出しにされようと驚かなくなった。あまりに強く絶望したので、あらゆる絶望に対して強くなり、生きつづけるただ一つの方法は執念深く

絶望をひき起すものに反逆しつづけることだということも語ったのである。逆説的な言い方をすれば、人間に絶望することは人間の希望である。

九月の初め、私たちは西条に帰り、間もなく学業も再開され、年があける頃は、卒業生を送って、久方ぶりの学芸会が企画された。もう誰も小説を読んではいけないとはいわなかったし、私は大っぴらに堂々と小説を読みふけた。学芸会に豊島与志雄訳の『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴァルジャンが燭台を盗むくだりを、私は脚色し、演出して舞台にのせたりした。

三年を終えると、私は岩国の女学校に転校した。父の勤務地が大竹になったからである。転校には馴れていたもので、新しい学校になじむのに格別苦労した覚えはない。私は学業はごく普通に、あとは小説ばかり読んでいた。岩国は八月十四日、終戦の前日に焼け、駅のホームもなくて、チビの私は毎日列車によじのぼるのが大変だった。終戦後しばらくの間は、列車という列車は引

揚者と復員の軍人と闇商人であふれ、毎日の近距離の通勤者や通学者は列車の箱の中には入れず、せまいデッキにぶらさがって乗るのがやつとであり、高所恐怖症の私は大竹と岩国の間の鉄橋を渡るとき、目がくらみそうに怖かったのを覚えている。

復員軍人、引揚者、闇商人、幼年学校や予科練から帰って来た中学生、街をうろつく浮浪児、それらは私にとって広島の焼跡につづく、戦争のアルバムである。水を打ったような秩序、分列行進、国旗、国歌、制服、戦争時代のあらゆる歌はすべて、あの学校工場で被服廠長を迎えた日に乱打された記憶につながるし、戦争中に神々しくひるがえっていた「愛国」「忠誠」「必勝」の旗の波は、原爆の瓦礫と白骨と蠅と蛆に覆われた負傷者と、その後数年にわたってあらゆる街角にうずくまり、道行く人に手をさしのべていた浮浪児たちの風景の上に不気味に舞う悪夢の蝶の群である。その蝶は捕えると、指の腹にべったりと、いやらしい、ぎとついた粉がつく。からだ中に蕁麻疹がおこる。はっきり言おう。もし、愛国、忠誠、必勝、といった言葉を唱えた怪物を国家と呼

ぶのなら、国家は、日本は、大部分の日本人をベテンにかけたのだ。そして、何ひとつ責任をとらなかったのだ。多くの日本人は、単に日本に生まれたという理由で、意味もなく殺され、家を焼かれ、親を失い、そして人間を信じる心を殺された。

ああ、もう、国などというわけのわからないもののことを考えるのは、たくさんだ。人間のことを考えるのでせいっぱいなのである。あの大戦争の貴重なにがい経験以来、私は二度と「国のため」などという口ぐるまには乗せられない自信がある。なぜなら、国のためになることは人間のためにはならないことがきわめて多いのである。そして大層皮肉なことだが、日本は国粹主義的なあの戦争によって、日本に生まれ、日本に育った、私を含めた多くの日本人に、国家への恐怖をいやというほど体験させてくれたのだ。もし、第二次大戦後の世界の国々の国民性を述べて、日本人的という表現があるなら、日本人とは国に裏切られた傷痕を持つ国民だと言ってもよい。

そして、これもまた大層皮肉なことだが、アメリカやソヴェイトはそれぞれに自国の国家主義を煽り立てようとして、彼らがその原子科学の威力を示せば示すほど、国民たちは国家から離反するだろう。つまり、彼らはこのかけがえない地球で、国家単位の思考方法が、原子時代では無意味なことを、次つぎと実証してくれているのだから。いかに白を黒と言いくるめるのがうまくても、現代の世界ではアメリカであろうと、ソヴェイトであろうと、日本であろうと、「国のために」という言葉を、「人間のために」とは言いかえられない地球上の明白な事実がある。とにかく、私は国のために、まともな人間の呟きを殺されることはもう真っ平だ。「人間の呟き」を、—— 生きている人間が、生きることを主張する人間の叫びを表現する自由を、戦後に生きのびた日本人は、あざむかれて殺された同胞たちの血を代償に得たのである。

だが人間は怠け者である。わずかな怠惰をむさぼるために、人びとは表現を欠伸でごまかす。ほんのひと睡りしているうちに、

回り舞台は回っているものだ。ついうっかり、なに、こんなことは言う必要はないさ、わかりきったことなのだから、などと暢気にぼんやりしていようものなら、気がついたときには猿ぐつわをはめられている、ということにいつなんどきなるかわからない。

特攻隊で飛び立った少年は、なぜ自分を死に追いやる味方の基地めがけて自爆しなかったか？ なぜ母は、往来に出て「日本の氣違い」と喚かなかったか。なぜ父は海軍軍医を辞して市民の医者とならなかつたか。なぜ、私は教師に乱打されながら、大声をあげて泣き叫ばなかつたか。なぜ若い夫たちは妻と子を捨てて半のように柔順に死を約束する戦場におもむいたか。すでに、その時点では、すべての日本人は動き出した歯車の中では歯車にしがみついて国を死守する以外に生きつづける方法はないと観念したからである。歯車はいつでも目に見えないほどのろさで動き始める。人びとの欲望をそそるさまじまな甘い言葉と、威しの両戦術で、人びとを歯の間にすくいあげるのだ。他人の愚かさをうそぶいて軽侮するだけの人びとは、やがて、傲慢の罪に問われる。す

べての人びとはそのほんの少し前、まだ言えるうちに、思うことを言わない怠惰の責めを必ずとらなければならない。そのときは、無力な老人も、子供も、赤ん坊さえも、すべて一緒くたにある。

岩国の女学校の一年間を、私は大方図書館通いで過した。岩国は山と水の美しい国である。錦帯橋で有名な錦川の堤は春は桜、秋は紅葉で埋もれ、女学校はその川のほとり、川西と呼ばれるところにあった。その川西から堤に沿って一キロばかり上ると錦帯橋のたもとに着く。ここに旧城跡があり、こわれかけた築地のある古い武家屋敷の棟が残っている。戦後間もなくの頃は堀も石垣も草の繁るにまかせて、秋は散りしいた紅葉が燃えるほどに塚をなしていた。この武家屋敷の一部を抜けたところに図書館があった。明治時代のしっかりした洋館だが、倉のように窓が小さく、太い柱が部屋の中に何本かある薄暗い建物である。昼でも電燈の要るような部屋の中に灯は乏しく、なるべく窓際を選つて、本の頁を繰ったものだ。不思議なことだが、この焼野原で、私は古い

日本の文学を読み始めた。『源氏物語』を註を頼りに須磨、明石のあたりまで読んだのはこの頃である。この頃の私の読書はただ乱読で、明治以後のものでは、四迷、鏡花、独歩、啄木、花袋、泡鳴、秋声、秋江、有島武郎、谷崎潤一郎、横光利一、芥川龍之介、武林無想庵、など手当たり次第に読んだ記憶があるが、不思議なことに漱石にはあまりなじめず、代表作といわれるものでも身を入れて読んだのは大学に入ってからである。志賀直哉も同様である。なぜか、彼らは私に「教師」の印象を与えたのである。

戦争中に現役の作家で文学らしいと感じた人に、太宰治がある。私は後年、彼があまりに自分と同質の弱みを持つせいかしばしば彼の悪口を言うようになったが、あの「カシラア、ミギ」の分列行進をやっていた頃、彼の短編を読んで、「ああ、ここに生きてい言葉がある」と感動した鮮やかな記憶がある。そしてその暗い時代に、一筋の光明を与えてくれた人が、いつも心のどこかでひっかかり、その故にいつそう彼を意識してのり越えようと思つているところがある。

その図書館はもともと吉川家の資料館であったと聞いた。三十年を経て、このなつかしい武家屋敷の辺りを散策し、ここに図書館が昔あったはずだがと訊ねても、知る人はいなかった。あきらめて行きかけると、地理感覚のよい同行者が、「ねえ、あの建物じゃないですか」と木立の中の古風な建物を指さした。見ると、見覚えがある。

中に入って受付で訊ねると、確かに戦後、ごくわずかの間、図書館として使っていたことがあるという。当時市の図書館は占領軍に接收されていて、この「徴古館」と称する資料館が図書館になっていたのだという。

戦後の、あの解放の時期に——私にとってそれはまさに解放された、生涯で最も明るい時代だったが——むさぼるほどに人生に対する好奇心にあふれていた時代に、何もかも焼きつくされた崩壊のあとに、辛うじてわずかに残されていた、人の心を書き記した書物を、ほこりの中で公開してくれた場所である。新しい出

出版物はまだほとんどなく、またあっても、飢えている女学生のお小遣いでは買うことのできなかつた本を、人生の糧を、私に与えてくれた場所である。

十五、六歳の少女にしては極端に早熟だった私は、その故に孤独だった。友人は文学書しかなく、私は教師を求めなかつた。戦争が私に時代の権威の代弁者である教師を拒絶させたのである。軍国主義から民主主義へとあれほど滑稽に豹変した権威の代弁者たちを、私は最早、あてにするわけにはいかなかった。私の少女時代を培ってくれたのは図書館だけである。

三十年ぶりに私は少女時代の残骸を辿って広島周辺を旅した。広島、広、呉、大竹、岩国、江田島にはありし日の帝国海軍という巨大な機構の遺跡の数かずがある。人間の築くあらゆる機構は、人間の欲望の表現であり、その機構の中で人間を窒息させることで崩壊する。つまり人間は欲望によって生きるが、同時に欲望によって殺される。唯一の希望があるとすれば、人間は欲望

によって殺されるかもしれないということを知っていることだ。

幼年期から少女期にかけての追憶は、そうした巨大な機構の中で身近な人びとが不気味にうごめき、単に軍人の子弟ということでもそれを不気味に周囲から見守られる、嘔吐をとまなう幻惑的な色彩に彩られている。用意周到に仕組まれた機械の中で、個々の人間がいかに哀れに、さもしく、きらびやかで、欺瞞に満ちた、人間の声でない甲高い機械の声で物を言うかを、私はあまりに幼くて、聞きとりすぎた。私は裸の王様に奇声を発しようとして、口をふさがれた子供だった。

青春期を経て、結婚し、子供を生み、育て、更に十余年の歳月を、私は似通ったパターンの中で過した。先人たちの辿った、見覚えのある道に行きあたり、私は戸惑った。祖先の血は、その道の「真中をお歩き」と言っているようでもあり、「ああ、また、同じ道を来てはいけないよ」と言っているようでもあった。口々に喚く亡霊たちの声の中で、細く静かな声が私の進路を変えさせ

ることもあった。またずっと行手で、生まれる前に死んでしまった子供が立って手招きすることもあった。

私は時折、草を掻き分けて新しい道をつくっている人に出遭った。また、危険な岩をよじ登り、足を踏みはずして転落していく人を見た。曲り角にくるたびに、私は立ち止り、亡霊たちの囁く声に耳を傾ける。「よい道は行き止りかもしれないよ」「そんなに急いで、近道を行って、はいけない」「ここで、わたしは陥穽に落ちたのだ」

甦る風景の中に、亡霊たちは灰色の着物をひるがえして歩いている。